

末黒野

すぐるの

6月号 (通巻850号)



岸の花

小川 玉泉

(名譽主宰)

風にのり川面を越ゆる岸の花

鶯や父祖の墓域へ声ゆたか
初蝶の羽をたたためる鏡石
差し潮の川面彩り散る桜
風にのり川面を越ゆる岸の花
舟人へ両堤より散る桜
緑青の御堂の屋根や花の冷え

毎年三月から四月にかけて、各地を賑わす花はさくら。単に花で通る国花である。細長い日本列島の地形が、花との出会いを長くしてくれている。取り分け散り際の潔さは、国民性を培ってきた。

この句の情景はありきたりであるが、江ノ島へ注ぐ境川の橋の袂の早咲きの一樹に惹かれたものである。

花

畑焼く人流れに鋤を浸しおき
春暖炉遅延原稿書く深夜
ささやきかつぶやきか田の夕蛙
春禽の三羽発ち二羽入る風樹
利久書の軸紅椿一枝活け
花は二分朱塗の橋の風かたく
鉦彫のみ仏の手や花の冷え
道草の芹抜く水を濁さじと
花の雨音立てて出る缶コーヒー
さくら散る川なら筏地なら塵
木の芽垣母より大き小学生
痛む首回せばこきと木の芽雨

松本三千夫

懸凧

買ふ小声売る大声や梅まつり
老梅や色無き庭に紅ひらく
橋の名は村の名春の未だ浅き
誰にともなく日は注ぎ春の川
会ふ人の声の明るし花すみれ
歩くことそれだけでよし木の芽風
海に丘に三月の空広ごりぬ
波音のとどく松が枝懸凧
春水の流れ石抱き巖抱き
松の蕊波の音より明け初むる
永き日や竹の香強き四つ目垣
猫の貌まんぼうに似て春兆す

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

千曲川

石黒興平

北窓を開き校塔まなかひに
曲がるたび春日溶け込む千曲川
ホームより望む残雪高嶺晴
訥々と仲居の真顔独活うまし
天棚の煤ぶくれなる春炉かな
山祇を乗せたる勢雪解川
払暁や曲玉なりの春の月
町中の海抜表示冴返る
乗り継ぎて見舞帰りや月おぼろ
高低の雲の遅速や春一番

雉子鳴く

田中臥石

雛の夜の夫婦に届くちらし鮎
震災の津波の忌なり梅の花一
皂莢の芽吹きを天へ光昌寺
畑打の鍬に蛇乗り放りけり
朝粥の一椀のみや分葱饅
雉鳴くやはたと止みたる女声
春昼や己が影置く潦
菜の花や遠く相模の海青く
剪定の楨垣揃ふ冠木門
観桜や道遅れゆく里の山



朝日影

森清堯

金縷梅のうすら日ほどく纏れかな
ひもすがら軽き水音梅八分
大津絵を展示の庵囀れり
隠沼の水脈の二筋残る鴨
天に水湛ふるさまの雨水かな
海苔箸の波のこまやか朝日影
箒目の波を乱しで落椿
ものの芽の十色百態雑木山
間遠なる初音を待ちぬ奥社徑
春の月城下の蕓一望に

春の星

森清信子

吹き下ろす芯持つ風や枝垂梅
花童ちんまりと母縁に座し
高原の摘まめさうなり春の星
大壺を生み出す轆轤百千鳥
のど飴の袋回り来梅林
羽衣のやうな薄雲春秋
金星や寺門の奥の深き闇
好日に目覚むる山や雑木の芽
菜の花や海沿ひに行く一輛車
指先に水を弾きぬ三月菜

多喜二忌

安 齊 久 英

仙石原の地肌頭や野焼跡
拝殿へ禰宜の杳音冴返る
ランナーの春の大地を蹴り上げて
日すがらを波風荒ぶ多喜二の忌
春愁やノートの端に友の名を
寄らで過ぐ牧水歌碑や春時雨
灯に映ゆる雛の目差し従容と
春雷や幽かに揺るるイヤリング
一盛のサラダや春の苑めきて
納豆を右へ左に掻く余寒



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



蝶の屋

齊藤マキ子

梅が香や造り小島へ太鼓橋
轆轤より立ち上がる壺木の芽風
春光や絵硝子に咲く紅き花
朧夜や長きホームの端にゐて
女坂踏み場なきまで落椿
蝶の屋砂場にまるき山二つ
円墳の裾に長けたり露の臺

つくし野

堺 昌子

春風やむなしくゆるる絵馬の数
ひまご抱く夢や雛店のぞきゐて
セロ弾きの路上ライブや冴返る
薔薇の芽や明治を醸す山手館
風にのる調律の音日の永し
猫のいびき聞きつつ読書うらけし
巻爪のくひ込む靴や山笑ふ

色ふかめ咲くを競ひぬ黄水仙
梅かをる好文亭のこけら葺き
つくし野や風のはこべる妣の声
空ひきよせ小櫓の芽吹き川の音
春めきぬ回る水車の水の色
紅白の梅の花びら風をよび
芹その他財布のゆるぶ道の駅

梅園

吉田きみえ

つらつら椿

岡田史女

馴合ひの友と梅園見て飽かず
沈丁花蕾なれども香りたち
静寂をしかと蓄へ寺の梅
指折つて幼児と数ふ春の鴨
小流れの光りて茶屋の梅三分
尼寺の釜のたぎりや春の雨
奢る世に暮し梅見の旅づかれ

多喜二忌

今村千年

ゆるやかに実朝の海春兆す
彼岸西風鐘の音街に行き渡り
大寺の百間廊下冴返る
虚子句碑も臨春閣も梅のなか
黙然と正座の妣や多喜二の忌
音立てて疏水を流る春の水
生くること楽しくなりぬ百千鳥

春の風

岡野里子

ふるまひの湯茶の甘さや臥竜梅
観梅や東北弁と広東語
ほとばしる水の濁りや猫柳
朝よりの雨のつらつら椿かな
露味噌やひねもす風の荒々と
強東風や眼の痒き昨日今日
竹林の奥に出で湯や風光る
芳しき雨とはなりぬ梅の花
一連の浮子ののたりと春の風
淋しらの風鳴く島や土佐水木
春の雪林泉に静けさつのらせて
春光のせせらぎの音風の音
咲きそむや風にもまるる姫こぶし
藤棚の木組あたらし風光る

青炎集

松本三千夫選



雛飾る雪崩の音を聞きながら

栗原

千葉 惠美子

今年また帰らぬ孫に雛飾る

墨痕も薄れ享保雛の箱

夫繕ふ雛の道具やあれこれと

雛あられ少しつまんで幼な子に

雛納め今日穏やかな日なりけり

大網白里

亀卦川 菊 枝

風二月雀流るる荒鋤田

末黒野を出て取り戻す影法師

ふる里のあるゆゑさびし犬ふぐり

三月やときをり雪の降る故郷

帰り来たる東京すでに朧かな

春の雨深夜に及ぶ物思ひ

下萌の青きを広くローム層

朽舟のたゆたふ影や春の水

春塵をしづめ音なき朝の雨

信玄の国やいづれも桃の花

簞に初音聞ゆる黙破り

菅畑や出荷の轍入り乱れ

横浜

高木 邦雄

横浜

新井 八重子

啓蟄や菜につく虫を鳥あさり

風硬し川端柳青みをり

色淡き堤の並木木の芽雨

塵出して又も噎せをり春の鬱

春大根の二股売られ直売所

鳥雲に都心志向の若きらよ

横浜 本間 せつ子

灯台へ辿る山路や藪椿

しんしんと明けゆく空や木の芽冷え

春草や廃車の屋根も猫の道

ねむる児に添ふる母の手春月夜

渾身のややの一步やひなまつり

卒業生橋の袂でまた別れ

横浜 上野 静子

水音のかすかや光る猫柳

梅林の堰を越したる水ゆたか

背丈ほど枝垂れてをりぬ迎春花

山菜莢に足どり軽き小径かな

渾渾と熊笹の下春の水

部活の子等駆け行く坂や雪柳

横浜 滝沢 いみ子

せせらぎの小さき堰や春の音

春耕や農夫は紐を定規とし

古民家にひひなの灯籠の火

里の梅神鈴の音のかすかなる

木の芽道足ゆらゆらと乳母車

開発のクレーン染めぬ春夕焼

横浜 鏡 英子

着脹れのパスポート手に旅一步

北欧のオーロラ見たり冬の旅

北欧の宿の露天湯冬銀河

アイスランドの溶岩台地冬の虹

放牧の馬寄り合へり吹雪く中

寒空の大露天湯の泥パック

横浜 及川 照子

田の神の目覚め促す春の雨

木の橋の子ら覗き込む春の水

じやんけんで登る石段芽吹山

紙雛目鼻の無くて美男美女

新らしき巣箱を抱く大樹かな

三椏の花淑やかな三姉妹

横浜 太田 良一

風船の人込み抜くる大路かな

地球儀の海の広さや鳥帰る

亀鳴くや遊具を置かぬ小公園

春寒や軍馬軍犬慰霊像

白無垢の明眸皓齒梅真白

車より犬の貌だす春日かな

耕 土 集

黒滝志麻子選



草萌や逆上がりの子宙を蹴り
横 浜 大塚かずよ

下萌ゆる保育園児の飛び跳ねて
潮の香や絵筆の奔る春日和
手から手へ稚の抱っこや雛祭
大見得に屋号飛び交ふ春の宵

梅一枝持つる女人の電車かな
平 塚 尾崎千代一

自家製といふ頬刺を買ひにけり
春遊やご朱印帳は荷の一つ
光風や奥社へ誘ふ木の根道
満堂へ高き返事や卒業子

青き踏む鳥語明るき里山に
横 浜 松橋 輝子

春大根背伸びの肩のつやつやと
うららかや畦道に会ふ乳母車
ふらふらこや卒寿の足のしかと漕ぐ
蒼天へ弾く児の声花辛夷

噺せ返る臘梅園の香の強き
横 浜 加藤 タミ

節分草秩父の山の風を浴ぶ
ハイウエイの茫と富士山春日和
風光る蜘蛛のオブリジェは子を散らし
厨房に立つ日の戻る弥生かな

地祭りの祢宜の袴や春の泥
横 浜 高橋 正江

下萌えて越後平野の目覚めかな
故郷の変はらぬ山河雛の家
啓蟄やブルドーザーの造成地
君子蘭部屋に積まるるダンボール

稜線の重なる出羽や遠霞
横 浜 長谷川はまゆう

日だまりをとどめて萌ゆる草の春
閉店の紙裏返す春疾風
ゴルフアの球春泥を弾きをり
小包の端を湿らす春菜かな